

令和元年6月17日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03090

研究課題名(和文) 戦間期トルコ共和国における国民意識の内面化

研究課題名(英文) The Formation of National Identity in the Republic of Turkey during 1930-1940s

研究代表者

小笠原 弘幸 (Ogasawara, Hiroyuki)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：40542626

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究によって明らかとなった、トルコ共和国における国民形成の性格は、つぎの二点に集約されうる。1) 共和国初期において、非常に強権的な形の国民統合・国民意識の形成がなされた。さまざまな分野で、意図的にデザインされた「鋳型」に国民意識を押し込んで形成しようという試みがなされた。2) こうした強力な「上からの国民形成」にたいして、アタテュルクの死後より、揺り戻しが発生した。アタテュルク時代に規定された「国民の形」は、読み替えと解釈によって、徐々に変質していった。道徳教育に形を変えたイスラミズム的な教育の導入も、そうした「下からの」ネゴシエーションの成果のひとつである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

年々、中東・バルカンにおける地域大国として、トルコ共和国のプレゼンスは高まってきている。にもかかわらず、これまで、我が国ではトルコ共和国の歴史に焦点を当てたまとまった学術的研究は存在しなかった。トルコはなぜ、中東で唯一、安定している国民国家を形成しえたのかという問題、すなわち本研究による検討は、今後の中東の将来を見据えるための重要な材料を提供する。その意味でも、本書の持つインパクトは大きいものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The characteristics of the nation-building in the Republic of Turkey investigated by this study can be summarized in two points: (1) At the beginning of the Republic, the national unity and national consciousness were forcefully introduced. Public awareness was incorporated into a deliberately designed "template." (2) Against such a powerful "formation of a nation from above," there has been a backlash since Ataturk's death. "The form of the nation" defined in the Ataturk period gradually transformed its meaning by interpretation. The introduction of Islamic education, which has been disguised into moral education, was one of the fruits of such "from below" negotiation.

研究分野：歴史学

キーワード：トルコ共和国 オスマン帝国 ナショナリズム イスラム 歴史認識 世俗化 国民形成 歴史教科書

## 1. 研究開始当初の背景

1914年に勃発した第一次世界大戦の結果、オスマン帝国(1299~1922年)が崩壊したのちに成立した中東アラブ諸国は、一時期は欧米列強が設定した枠組みの中での国家建設をやり遂げたかに見えた。しかし21世紀に入って、アラブの春(2011年)の挫折・IS(いわゆる「イスラム国」)の登場・シリア内戦(2011年~現在)といった混乱に端的に示されるように、曲がりなりにも統合を保っているチュニジアをのぞくアラブ諸国はいずれも、国民統合の不完全さを露呈することとなった。

本研究が対象とするトルコ共和国(1922年~)は、建国の父アタテュルクのリーダーシップのもとで、脆弱な国民統合しか成しえなかった他の中東・アラブ諸国に比して、相対的に確固たる国民国家を形成することに成功した。ただしトルコ民族以外は国民として認めず、国民の圧倒的多数が信仰するイスラムを抑圧するという、極端な民族主義と世俗主義を押し進めたゆえの成果である。クルド人やイスラムをめぐる諸問題をはじめ、その歪みをもたらす民族差別・宗教問題が指摘されて久しい。こうした国民統合をめぐる歴史的な分析は、政策や制度など、外面的・形式的な側面に分析が集中する傾向にある。しかし、トルコ建国期における国民統合の強引さがもたらした「歪み」を理解するために必要なのは、こうした政策にたいして、トルコに住む人々がどのように相対し、受容あるいは反発したか、そのネゴシエーションの過程を明らかにすることであり、本研究の背景もそこにある。

## 2. 研究の目的

本研究は、以上の学術的背景に基づき、1920年代から1940年代にかけてのトルコ共和国における民族主義と世俗主義を軸とした国民統合の試みのなかで、トルコに住む人々がどのように国民意識を内面化していったか、その過程を明らかにする。その際、主たる分析の対象とするのは教科書(歴史教科書を中心とする)・学問的著作物、一般向けの著作物、そして政府広報やメディアなどに見られる支配の正統性の象徴およびイデオロギーである。これらが、国民意識を変化させる役割を中心に担うと同時に、その変化を反映していると考えられるからである。

また、トルコ共和国の前身たるオスマン帝国における国民意識やアイデンティティがどのように形成され、受容されていたかという問題についても、共和国期の分析のための重要な前提であるため、これについても研究対象とする。

## 3. 研究の方法

戦間期トルコ共和国における国民意識の内面化を分析するにあたり、前身となるオスマン帝国の人々が抱いていた国民意識、そしてそれをうけてトルコ共和国における国民意識がどのように変容したか・形成されたかという、ふたつの時期に分けて分析する。その際には、学問的な著作物、教科書、新聞・雑誌など定期刊行物、同時代人の手による回顧録、教育相などで作成された公文書などの史料を用いる。

これらの史料は、トルコ共和国における図書館や公文書館(イスラム研究センター、アタテュルク図書館、バヤズィット国立図書館、大統領府公文書館、国民図書館など)において計画的に収集する。

## 4. 研究成果

本研究の最大の成果は、研究代表者が編者を務めた『トルコ共和国 国民の創成とその変容 アタテュルクとエルドアンのはざままで』(九州大学出版会、2019年、326頁)の刊行である。本書は、「はしがき」「序章」「終章」に、本論をなす十章から構成されている。以下にその構成を記す。

### <目次>

はしがき(小笠原弘幸)

序章「アタテュルクのトルコ」を問い直す 共和国史をめぐる研究潮流と本書の射程(小笠原弘幸)

### 第一部 アタテュルクの描いたトルコ国民像とその創成

第一章 国民史の創成 トルコ史テーゼとその後(小笠原弘幸)

第二章 国民創出イベントとしての文字革命(礪山祐子)

第三章 感性を「統合」する 国民音楽からトルコ民俗音楽へ(濱崎友絵)

第四章 国父のページェント ムスタファ・ケマルと共和国初期アンカラの儀礼空間(川本智史)

## 第二部 トルコ国民像をめぐるネゴシエーション

第五章 アタテュルク後の宗教教育政策 ライクリキの転換点(上野愛実)

第六章 国民国家トルコとアナトリアの諸文明 イスラム化以前の遺跡をめぐる文化政策(田中英資)

第七章 トルコにおける抵抗文化(柿崎正樹)

## 第三部 交雑する空間のなかのトルコ国民 国境、移民・難民、隣国からの眼差し

第八章 トルコ共和国の協会 領域紛争と国境(沖祐太郎)

第九章 トルコの移民・難民政策(今井宏平)

第一〇章 イラクからみるトルコ 世論調査の計量分析から(山尾大)

## 終章 激動の五年間(二〇一三～一八年)と大統領制の始まり(今井宏平)

研究代表者は、「はしがき」「序章」「第一章」を担当している。

本書は、建国から現在に至るまでのトルコ共和国における国民形成とその変遷をそのテーマとしている。焦点が当てられるのは、歴史、文字、音楽、儀礼、宗教、遺跡、民主運動、国境、移民・難民、そして隣国からの評価であり、多様なディシプリンを持つ若手研究者によって執筆されたものである。

本書によって明らかとなった、トルコ共和国における国民の形成の性格は、つぎの二点に集約される。

(1) まず、トルコ共和国初期において、非常に強権的な形の国民統合・国民意識の形成がなされたことである。例えば歴史認識・歴史教育(第一章)についていえば、「トルコ史テーゼ」という、ある種の偽史ともいえるトルコ民族史が、実証的な歴史研究を無視した形で教育に導入された。その反発も強く、アタテュルク死後には徐々に撤回されてゆくが、これが国民の民族意識形成に与えたインパクトは強かった。歴史に限らず、さまざまな分野で、意図的にデザインされた「鋳型」に国民意識を押し込んで形成しようという試みがなされた。

(2) こうした強力な「上からの国民形成」にたいして、建国の父アタテュルクの死後より、揺り戻しが発生した。アタテュルクの遺志に明確に逆らうことは国是として禁止されている。しかし、アタテュルク時代に規定された「国民の形」は、読み替えと解釈によって、徐々に変質していった。道徳教育に形を変えたイスラミズムの導入も、そうした「下からの」ネゴシエーションの成果のひとつである。

現在のトルコでは、エルドアン大統領ひきいる公正発展党政権によって、イスラミズム的な価値観とそれに基づく政策が徐々に採用されているが、それはある意味では、アタテュルク時代に強く抑圧されたことに対する反発が生んでいるものだとはいえるだろう。

年々、中東・バルカンにおける地域大国として、トルコ共和国のプレゼンスは高まってきている。にもかかわらず、これまで、我が国ではトルコ共和国の歴史に焦点を当てた研究論集は存在しなかった。トルコはなぜ、中東で唯一、安定している国民国家を形成しえたのかという問題、すなわち本書による検討は、今後の中東の将来を見据えるための重要な材料を提供する。その意味でも、本書の持つインパクトは大きいものと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

小笠原 弘幸・秋葉 淳(監訳) 勝本 英明・山本 敬祐・坂田 舜・田中 みなみ・岩元 恕文(共訳)「ユースフ・アクチュラ『三つの政治路線』」『史淵』155号、2018年、135-165頁。査読無

Hiroyuki Ogasawara. "The Quest for the Biblical Ancestors: the Legitimacy and Identity of the Ottoman Dynasty in the Fifteenth-sixteenth Centuries." *Turcica*, 48(2017): 37-63. DOI: 10.2143/TURC.48.0.3237135 査読有

Hiroyuki Ogasawara. "Enter the Mongols: A Study of the Ottoman Historiography in the 15th and 16th Centuries." *Osmanlı Araştırmaları*, 51(2018): 1-28. 査読有

小笠原 弘幸「書評: セズギ・ドゥルグン著『王の領地から祖国へ』」『史淵』第154号、2017

年、147-154 頁. 査読無

小笠原 弘幸「書評：Gavin D. Brockett, *How Happy to Call Oneself a Turk : Provincial Newspapers and the Negotiation of a Muslim National Identity*」『イスラム世界』87(2017.6), 33-39. 査読有

〔学会発表〕(計5件)

小笠原 弘幸「オスマン帝国君主のカエサル称号とローマ帝国意識」九州史学会 2018 年大会イスラム文明学部会、2018 年 12 月 10 日.

Hiroyuki Ogasawara. “Narrating Disobedience to the Seljuk Dynasty in the Ottoman Sources.” 21st Annual Mediterranean Studies Association International Congress, June 1, 2018, Sant’ Anna Institute (Sorrento).

Hiroyuki Ogasawara. “Making the Genealogical Tree of the Ottoman Dynasty in the 15th-16th Centuries,” 14th International Congress of Ottoman Social and Economic History, Sofia University, 27 July 2017.

小笠原 弘幸「トルコ共和国史の潮流」九州史学会 2016 年大会イスラム文明学部会、2016 年 12 月 11 日.

Hiroyuki Ogasawara. “The Identity and Legitimacy through the Ottoman Genealogical Tree Development,” 19th Annual Mediterranean Studies Association International Congress, May 27, 2016, Palermo University (Palermo).

〔図書〕(計2件)

小笠原 弘幸(編)『トルコ共和国 国民の創成とその変容 アタテュルクとエルドアンのはざままで』九州大学出版会、2019 年、326 頁.

小笠原 弘幸『オスマン帝国史 繁栄と衰亡の六〇〇年史』中央公論新社、2018 年、317 頁.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：沖 祐太郎

ローマ字氏名：OKI Yutarou

研究協力者氏名：今井 宏平

ローマ字氏名：IMAI Kohei

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。